



恋愛小景



情交 「静寂」

さつき

序

クリスマスに程近い日曜日。午前11時。街はクリスマス一色に染まり、商店などではクリスマスをあてこんだ商戦ムード真っ最中の日。外の喧噪とは無縁とばかりにベッドの中で微睡んでいる女が居た。カーテン越しに入る光が眩しいのか、時折寝返りを打ってその光から逃れようとしている。

その隣で目を覚ましたのは男だ。癖のある髪の毛を右手でかきあげ、室内の一点に焦点を無理やり合わせる。視線の先にあったものは、デジタルの卓上時計だった。

「11時か……」

眠気を払うように己の顔を一度撫でると、首だけを動かして隣でまだ眠っている女を見た。日光から逃れようと頭まで掛布団を被っている。盛り上がった掛布団がもそもそと動いているのは、更に奥に潜ろうとしているからであろう。思わず男の口元に笑みがこぼれる。

「むにゅー……」

女が何事かを言っているのだが、はっきりとした音にならない。寝言の類であろうか。左半身を下にして、男は半身を起こした。

「うにゅー…にゃー」

何事かをもごもごとつぶやく女に悪戯心を起こしたようだ、少し掛布団を捲り、男が女に話しかける。

「理奈、11時だぞ」

「うー、やー」

「もう少し寝るか？」

「んー…」

理奈と呼ばれた女はまた寝返りを打ち、男の体に軽くぶつかった。その閉じた目がゆるゆると開かれていく。完全に開き切ったのを見ると、もう一度声を掛けた。

「理奈、おはよう」

彼女の真っ直ぐな髪の毛を大きな掌で梳きながら、男はその顔を自分の方へ向かせた。

「にゅー…？おはよう。雅一。うぐう」

意識がまだ半分眠りの中にあるのか、まだ少し寝惚けているのかはわからないが、とりあえず目は開いている。

（…一応起きている、とは思いたい）

布団の上から彼女の体をあやすようにぽんぽんと叩くと、雅一はベッドから立ち上がった。

「メシの準備してくる」

「うん…」

布団の中から小さく手を振る彼女の目は、また閉じられようとしていた。

「……久々にこんな時間まで寝てた」

少し大きなコーヒーカップを両手で覆う様に持つと、理奈は熱いコーヒーを吹きながらそんなことを言った。

「歳食うと寝てられなくなるって言うな」

テーブルを挟んだ反対側に座っている雅一は、中央に置かれた灰皿に手を伸ばしながら皮肉とも取られるような言葉を口にする。

「まだそんな歳じゃないわよ。貴方の方が寝てられないんじゃないの？」

同じように皮肉な台詞を返していながらも、空気が変わることはない。通常の応酬の範囲内ということなのだろう。

「オッサンだからなかなか疲れが…」

「何が『オッサン』ですか。オッサンがこんな痕をつける程元気な訳ないでしょ」

煙草に火を点けた彼が混ぜ返すと、静かにカップをソーサーに置いた彼女が、自分の首筋の赤い痕を見せる様にして混ぜ返した。

「そういう格好を見せられたら、オッサンだろうと元気になるってもんですよ」

そう？と軽く流した理奈の格好は、それなりに扇情的なスタイルだ。ざっくり編まれたオフショルダーの丈の短いセーターを素肌に着て、下半身は下着のみという格好である。

「楽なんだもん、いいじゃない」

肩を竦めて受け流した彼女だったが、目を眇めて彼女の体を見る雅一の顔から視線を外し、残ったコーヒーを飲み干した。そのまま椅子から立ち上がる。

「…片付けしてくるわ」

「後で俺がやっとくからいいよ」

「ご飯作って貰って、食後のコーヒーまで淹れて貰って。上げ膳据え膳は嬉しいんだけど。女としては複雑よ。おかわりは？」

「じゃ、おかわりお願い」

はいはい、と軽く頷くと、揃いのカップを持った理奈が台所へ向かって歩いていく。その背中に寝室に持ってくるように頼むと、彼はテーブルを立った。

コーヒー入りのカップとソーサーを両手に一つずつ持った理奈が、寝室の扉をどうやって開けて入ってきたのかを雅一は知らない。気が付いたら寝室のドアが開閉する音がして、彼女が入ってこようとしているのを見ただけだ。

「……両手が塞がってて、どうやって開けたんだ、そのドア」

「お行儀が悪いから、秘密」

ふふ、と笑って片目をつぶっている。聞いても無駄なのだろう。一つ小さい溜息をつく、それまで読んでいた雑誌に視線を落とした。その手元にカップが置かれ、隣に彼女が横座りになる。

「悪いな」

「ん」

寝室の窓の下、ラグマットの敷かれた片隅。雑誌をめくる音と、カップがソーサーに触れる音がする以外、何の音もしない。うららかな日差しの中で、静かな時間がゆっくりと流れていった。

30分後。床に置いていた雅一の左手に、理奈の右手が添えられた。

「ん？どした？」

「何となく」

「そうか」

それだけの言葉を交わすと、また静寂。

更に10分後。雅一の左半身に視線が突き刺さる。最初は気のせいかとも思ったのだが、偶に視界の端に入る理奈の視線は、雑誌ではなく確実に彼の顔から体に掛けて投げられている。

「……どうした？」

「…ん、何でも無いよ」

「そうか」

視線はまだ体に突き刺さっているが、気にしない事にしたようだ。また雑誌に視線を落とす。

そして、更に5分後。大きな手の甲を軽く引っ搔く華奢な手があった。

(やれやれ……。この子はこれだから)

仕方がない、という顔で雑誌を閉じると、雅一は理奈に顔を向けた。

「あのね、理奈さん」

「はう？な、何？」

いきなり話し掛けられ、目を丸くして驚いている。

「構って欲しいなら『構って欲しい』ってはっきり言いなさい。ちゃんと構ってあげるから」

「うっ、や、その、あの、そういうわけでは」

さっきまで突き刺さっていた視線が、部屋のあちこちをさまよい始める。凶星だったようだ。

雅一は「仕方がないな」と小さく呟くとすっと立ち上がり、ベッドに向かって歩いていく。掛布団を剥いでごろりと横になると、理奈に向かって手招いた。

「こっち」

「え？」

「いいから、早く」

明らかに戸惑っている彼女をさらに手招きすると、戸惑いながらも同じように横になった。彼は彼女の頭を腕で抱えると、そのまま抱き寄せ耳元で囁く。

「...もうちょっと素直になりなさい。あなたは」

「うー、でも...」

不満げに呟く彼女の頭を大きな手が少し乱暴気味に撫でると、その呟きがぴたりと止まった。しかも腕の中で身悶えている。顔を覗き込むと、頬がほんのりと赤く染まっていた。照れているようだった。

「ま、そういう素直じゃないところも面白いんだけど」

彼は器用にも片手で掛布団を二人の体に掛け終わると、また彼女の頭に手を伸ばす。髪の毛を梳いてやりながら頭を撫でると、大人しくされるがままになっていた。

「暖かいね」

「うん」

「雅一、暖かい」

「理奈もね」

「うん」

雅一の頭を撫でる手のスピードが少しずつゆっくりになり、理奈の目はまたゆるゆると閉じられていく。

「少し寝るか……。起きたばっかだけだな...」

「んー...寝ようか。何かすごく気持ちいい...」

撫でる手が完全に止まった頃。寝息だけの静かな時間が、二人の間を流れて行った。